

東北 VALUE SIGHT 宮城



山元いちご農園株式会社 代表取締役
岩佐 隆 (いわさ・たかし)

1955年、宮城県山元町生まれ。
宮城県農業高等学校卒業後、就農。
宮城県農業青少年クラブ会長。
39歳で山元町議会議員に当選。
その後、2007年5月に議長を務める。
現在も新しいまちづくりを目指し、議員として町に携わる。
また、復興を目指し、2011年6月「山元いちご農園」を
設立、代表取締役に就任。
山元いちご農園株式会社
〒989-2201 宮城県亶理郡山元町山寺字北坪路12番地
E-mail : yamamotoitigo@gmail.com

宮城県山元町は宮城県の最南部にあり、海に面して気候は比較的温暖であることもあって、隣接する亶理町とともに東北地方最大のイチゴの産地として有名であった。

東日本大震災によって山元町のイチゴは壊滅的な被害を受けたが、イチゴ生産農家4人が再起に向けて立ち上がった。株式会社によるイチゴ栽培で震災からの復興に向けた第一歩をスタートした。

震災前は東北最大のイチゴ産地

東日本大震災の前、宮城県山元町は隣の亶理町とともに東北最大のイチゴ産地であった。2町合わせたイチゴの生産額は約40億円、イチゴ生産農家は380戸、そのうち山元町は約130戸であった。

あの震災によって山元町のイチゴ農家は壊滅的な被害を受けた。無傷で残った農家はほんの2～3戸、一部損壊を含めても10戸弱。つまり約9割以上がハウスを流され全壊したことになる。このため聞くところによれば、今シーズンの宮城県のイチゴ生産は平年の10%にも満たない水準に落ち込むことになるという。

震災前、私の自宅は防波堤が見える太平洋岸にあったが、基礎だけを残し今は跡形もない。

やはりイチゴ栽培の復活を

震災直後は、正直のところその日その日を生きているのが精一杯であった。避難所暮らしでガソリンもない中、水や食料の確保に腐心した。とてもこれからの生業を考えられる状態ではなかった。

ようやくこれからのことを考えられるようになったのは、震災後1カ月も経ったころであったろうか。私が言い出しっぺとなって、これからのことをどうするか、近隣の仲間に声をかけて何度か話し合いを持った。集まった人の意見の多くは、何だかんだ言っても、やはりイチゴの復活しかないだろうというものだった。今さら別の仕事もできないし、それ以外のことは考えられなかったのである。しかしそうは言っても被害の大きさ、深刻さを考えれば、

おいそれと踏み出すこともできない。やりたい人は多くいたが、これから借金をしてイチゴの復活に取り組むとなると迷ってしまう。話し合いを続けていく中では消極的な意見を言う人もいたのも事実であり、それは無理もないことである。個人でイチゴ栽培を再建するにしても1億数千万円はかかる。その資金調達をどうするのか。農地をどうするのか。不安材料を数えればきりがないのである。

最終的には私を含めた4人の仲間がイチゴ栽培の復活に取り組む決意をした。私を含めた4人は町の沿岸部でイチゴを生産してきたが、津波で自宅やハウス、農機具などをすべて流された。文字通りゼロからのスタートである。

株式会社で取り組む

スタートするに当たっては、個人で行うことも考



建設が進む「山元いちご農園」のハウス。
平成23年12月撮影。

宮城県 山元町 震災復興は「イチゴ」から

えたが、法人化することによって技術面や販売面などで従来の家族経営とは異なる新しい経営が可能になると考え、株式会社による生産を行うことに決め、「山元いちご農園株式会社」を昨年6月に設立した。会社を作るに当たっては、宮城県の農業改良普及センターに相談に乗っていただき、資金の調達や事業計画の策定等を指導していただいた。

総事業費は約4億8,000万円。国の補助金や政府系金融機関の融資によって資金調達にも目途がついた。津波で浸水した水田約2.6haを借り、そこに2,160㎡のハウスを8棟、合計約1.7haの栽培面積の計画である。このうち4棟は昨年中に建設し、残り4棟は今年度中の完成を目指している。1棟のハウスに1万6,000株の苗を植えるので、8棟合計では12万8,000株になる。苗は昨年11月に植え付けを開始した。

これだけの規模であれば、当然人手も必要になるので、地域の雇用の場としても貢献できるのではないかと考えている。

栽培方法は「高設栽培」。この方法は地面より高い棚にヤシがらを敷き、そこに苗を植えるもので、通常の土耕に比べ設備にコストは掛かるものの、土壌の除塩の必要がない。また、地面に植えてのイチゴ栽培は、作業するうえで腰に負担がかかるなど体力的にきついものであるが、この方法であればそうした心配もなく栽培の作業性も良い。生産が軌道に乗ってくれば、観光客によるイチゴ狩りもできる農園にしたいと考えているのでハウス内は土足禁止。イチゴ狩りを楽しむ皆さんに清潔でイチゴを摘みや

すい環境を提供したい。

産地復活に向けて確実に前へ

初出荷は今年2月の中旬から中旬を予定している。本来であれば昨年の秋に植え付けを行い、12月のクリスマスシーズンまでに初出荷を迎えたかったのであるが、少し遅れてしまった。しかし、幸いにも販売先に関しては、各方面からお問い合わせをいただいている。ありがたいことである。生産が軌道に乗り、まとまった量のイチゴを収穫できるようになれば、そうしたお問い合わせの中から販売の契約を結ぶことができるものと期待している。

今後は、国道6号沿いに直売施設を設けて販売したり、ハウスの中でイチゴ狩りを楽しんでいただける施設にしたいと考えている。現実には、まだまだ始まったばかりであるが、多くの皆さんに場所を覚えていただき、町外からもおいでいただくことによって、山元町を元の東北最大のイチゴ産地として復活させたいと願っている。



「高設栽培」によりイチゴの苗が植えられたハウスの内部。
平成23年12月撮影。